

菊池義泰画伯の思い出を語る会

平成 27 年 1 月 11 日 (日)

エイブル 2 階音楽スタジオ

12 月・1 月の床の間コーナーでご紹介した菊池義泰さんは、在郷の画家として生涯、故郷の風景を描き続けましたが、自宅アトリエには 100 号の大作を描きかけのまま、平成 14 年 9 月に急逝されました。77 歳でした。そこで、道半ばで逝かれた菊池さんを偲んで、縁のある方々にお集まりいただき、菊池さんの小学校時代から晩年に至るまでのエピソードやお人柄など、様々な角度からお話を伺いました。そして、画家の杉光定さんからは、菊池作品の特徴である「ブルー」に焦点を当てた作品解説もしていただきましたので、その一部をここにご紹介します。

【菊池義泰さんの略歴】

- 大正 13 年(1924) 11 月 30 日 (現在の) 鹿島市常広に生まれる。
- 昭和 18 年(1943) 旧制鹿島中学校卒業。上京し、川端画学校でデッサンを学ぶ。
- 昭和 19 年(1944) 現役入隊。
- 昭和 20 年(1945) 復員し、故郷に戻る。
戦後、洋画家 納富進(1911-1976)に師事。一水会、日展に出品を重ねる。
- 平成元年 (1989) 鹿島美術人協会第 3 代会長となる(~平成 12 年)。
- 平成 14 年(2002) 9 月 24 日自宅にて急逝。

◆菊池義泰さんの年代順に思い出トーク

①小学校時代<同級生の吉田則男さん>

菊池義泰君とは小学校の同級生で、昭和 6 年入学です。当時は、経済的にも、生活習慣も今とは大分違っておりました。今は北鹿島ですが、僕らの時代は鹿島村と言っていました。当時 6 歳くらいまでは、他の部落に遊びに行くのは親戚か何かでないと行ったことがない。小学校に入って初めて会う人が大半でして、義泰君も小学校に入って初めて知りました。

当時の小学校は、入学する時はまだ生徒の 2/3 は着物を着ておりました。かすりの着物、これも兄弟親戚から貰った古びたかすりの着物を着て来る人が大半で、ランドセルを背負って来る人は北鹿島では本町と乙丸くらいでした。農村部落の方でランドセルを背負った人というのはある程度裕福な人が多かったわけですが、義泰君は入学した時にランドセルを背負って来ていました。6 歳頃の義泰君の印象は、「気の利いた^{つら}面しとんにゃあ (利口そうな顔をしているなあ)」というふうに思っていました。

4 月に入学して正月を越した頃にあった図画の授業の時、担任の鈴木先生がブルーの画用紙を配って、雪景色を描けというふうに言われたことがありました。当時はクレヨンしか無いわけですね。ようやくクレパスが出かけた頃です。義泰くんはそのクレパスを持っていました。私達は 6 色のクレヨン、義泰君は 12 色くらいのクレパスを持っておりましてね。あの時は 12 色の中には白は無かったと思いますけれども、白が無くても見事に雪景色を描いていたことを覚えています。僕はこれには敵わんなどいうように思いましたね。その時初めて義泰君の絵は見事なものだと思いました。

それが小学校 1 年生の時ですが、他の科目も甲ばかりで、なかなか頭が良かったというのを覚えて

います。しかも、義泰君は何も勉強しないで、学校で習ったのだけで見事に甲ばかりでした。運動もできる方で走るのも好きだったようです。

そんな優秀な義泰君が、中学校の入学試験の時高熱のため受験できず、入学が1年遅れてしまいました。義泰君がとても悔しがっていたのを覚えています。

②中学校時代<美術部の林倫藏さん>

先程、小学校時代のお話を頂いた吉田さんとは中学校では同級生でした。菊池さんは1年後輩となりましたが、美術部で一緒でした。(右写真)当時の美術の先生は佐々木義政先生という方で、別名チャップリンと呼んでおりました。毎年秋になると校内の美術の展覧会があり、それに出品する為に美術部員が準備室に集まって、放課後絵を描いていました。写真を持ってきておりましたが、これは、その時の学校の様子です。(下写真)2階に美術の教室や準備室とかがあり、下の方に校長室や職員室、教室がありました。放課後、佐々木先生から個人的に教えて頂いた所が美術の準備室です。



そして、そこで、白いキャンパスに向かってパレットを持ってスイスイと描いておられたのが菊池さんでした。当時から菊池さんは油絵を描いておられ、キャンパスに向かう姿がとてもかっこよくて、すごいなあと思っていたのを覚えています。

戦後、折に触れ菊池先生の絵を見せていただきましたが、先生が亡くなられてからご自宅にお悔みに行った時、仏前に大きな100号の絵が掲げてありました。ブルーの空に白い雲が浮いた景色を描いた絵でしたが、非常に感動しました。奥様にお尋ねしたところ、もう一描きしなければ完成しないのに、これを完成しなくて亡くなったことを非常に残念がっておられたのを覚えています。



③20代の頃<後輩でスケッチ仲間となった野中康次さん>

菊池さんは小学校からの先輩で、4つ違いです。旧制中学校の上級生の時の印象は、非常に信頼できる、優しく、とにかく面白くて、ユーモラスな人でした。それから、ギターが上手かったですね。

びっくりしたことがあるのですが、昭和18年、最上級生の時に、ギターをぶら下げて学校に来られたのです。当時は編上げ靴履いてゲートル巻いて行っていた時代です。その時代にギターをぶら下げて、そして講堂でギター演奏されたんですよ。内容は愛国行進曲です。800人詰まっていますから、皆腰を落として耳を澄まして聴いていました。今でも印象に残っています。

ギターに関してはまだエピソードがあります。昭和20年、あーこれで死なないで良かったという、本当にそんな感じの時、バンドを作ったことがあるのですよ。鹿島村の本町のお寺に集まってバンドを始めたのですが、菊池さんはギターを弾いておられました。僕はハーモニカを持って、後ろに立ってばー

ばーばって吹いておけば良いということだったので参加しました。トラックに積まれて予科練の服を借りて、予科練の服は短いので、もう背中では皆丸出しですね。トラックに乗って、お祭りの会場で演奏して、昔の流行歌ばかりだったんですけどね。そんな思い出があります。おかしかったなと思いますね。

それから僕は佐賀師範学校に行ったのですが、佐賀師範には当時、画家の石本秀雄さんという方がおられたので、1年生の時から直ぐ美術室に行って指導してもらいました。そういうのが珍しかったらしく、菊池さんはよく僕のところへ寄られました。僕の家庭にぶらっと入ってきて、僕は「菊池さん」と呼んでいましたが、僕は康次ですから菊池さんは「康次さあん」って、のんびりした感じで呼ぶんですよ。「はい」って言うと、「おったやあ」と言って、のこのこ上がってくるのですが、僕は屋根裏部屋にいたものから、来る度に梁に一回は頭を打たれていましたね。

僕が佐賀師範の2年生の頃、ちょうど昭和22年で憲法施行記念の美術展覧会があり、その頃から絵の方は菊池さんに教えて頂いていました。

ある時は、三河内まで一緒に行ったことがあります。僕も師範の最初の頃は水彩を描いていましたから、バケツぶら下げて、三河内まで10km、歩いていくんですよ。まず、常広から乙丸まで菊池さんがスケッチ板をぶら下げて出てきて、「康次さん、行こう」と言って、中村を通って橋わたってそれから浅浦、浅浦から大木庭に越える峠があったのですが、今はトンネルになっていますね、その峠を越えて三河内まで行くのです。菊池さんは肩を横に振って歩かれるんですけど、体格いいですから、一緒に肩を並べると、僕は痩せているので付いていってる感じでした。周りの構図とか景色とか、何か面白い話ばかりしながら、一緒にいると見えるところも何でも似てきてしまう、そんな感じでスケッチに行っていました。(右上写真！25歳の菊池さん)



④30～40代の頃<絵を教えてもらった鈴木由紀夫・滋人さん兄弟…コメント紹介>

九州陶磁文化館館長の鈴木由紀夫さんと染色家で人間国宝の鈴木滋人さんの兄弟は、菊池義泰さんに絵を習いに行かれていたそうです。お二人とも小学生の頃に北鹿島の常広までバスに乗って習いに行っていたということだったので、その頃のお話を伺いました。

菊池さんは、洋画家で日展審査員までされた納富進さんの愛弟子でしたが、鈴木さんのお父さんの照次さんが納富さんと親しかった関係で、小学生の頃3年間、水彩画と油絵を習ったということでした。

〈由紀夫さんの思い出〉 菊池先生はとにかく優しい先生で、声も表情も優しい方でほのぼのとされていました。決して押し付けるようなことは無く自由に描かせてくれました。時々先生が手本を示してくれましたが自分の感覚より遥かに大きくて太い力強い筆を入れてくれていた印象があります。多分、私の筆遣いが細くて華奢だったのだらうと思います。

〈滋人さんの思い出〉 菊池先生はスケッチを大事にされ、見たものをそのまま描きなさいと言われていました。私は菊池さんから「ものを見る」という基本的なことを習った気がします。菊池先生は温厚な人柄で、鹿島美術人協会の会長の時もどちらかというと会員のまとめ役で、がんがん前に出ていくタイプではなかったように思います。

⑤40代以降<画家仲間として金子剛さん>

僕が菊池先生といろいろな絵を描く過程で一緒になった瞬間というのは、納富先生とご一緒の時が殆どでした。それ以外では、僕が佐賀に移る前に鹿島の美術人協会というのを作った時のことがあります。

僕は、結婚して5年間、誕生院に小さな古い家を借りてK教室という絵の教室をやっていたのですが、そこに納富進先生や鈴木照次先生が来られて、K教室も良いけれど、鹿島で美術の協会を作らないといけないから、何かしなさいと言われました。そこで、菊池先生と相談して、僕は大学出てまだ若かったから、菊池先生から「金子さん、あんたが事務局長ばしない（しなさい）」と言われ、事務局をした経緯があります。

菊池先生は「そぎゃんなたー（そうですね）」とか、何かまったりした話方をされるんですよ。「そこつ、やいおんなあ、あいどま（荒っぽくやっているな、あの人たちは）」とか、今頃あんまり使わない言葉「そこつか（荒い・雑）」とか「なたー（ですね）」とか、そんな言葉をよく使われていました。

その頃、K教室に杉光定君とか、さっき話に出た鈴木滋人君とか由紀夫君とかが来てくれていました。だから菊池先生が大先輩で教えて貰っていたわけで、今聞いてびっくりしましたが、それで繋がったかなという気持ちがありました。

その頃、光武岱三先生が非常に熱心で、それから伯川俊夫先生、こういった方達が鹿島の美術の基礎みたいなものを応援して頂いたのですね。だけど、一番奔走されたのは菊池先生だったんだろうと今つくづく思っています。

納富先生の弟子だった菊池先生と二人で、納富先生のアトリエで、サムホール(はがき2枚くらいの大きさ)から最大60号までのキャンバス張りを何枚もしたことがあります。その時、菊池先生が「金子さんは人物ばかり描きおんなたー。あんたは人物ば好いととなたー」というような言い方をされました。私のモチーフは大学に入ってから家族ばかり描いてきました。東光会や日展には人物しか描いたことがないので。菊池先生のように風景で勝負したことは1回もない。

納富先生が風景の大家でしたから、今でも思いますけど納富先生が日展におられなかったら日展は違ったろうと思うくらい納富先生は燦然と輝いておられるのですよ。納富先生の画の素晴らしさというのは、今価値が出てきました。だから菊池先生も一緒ですよ。こういう素晴らしい風景画を描く画家が今はいないですね。本当に何かわけわからないようになってきている現状があります。

そういう感じで菊池先生とご一緒させていただいたのが嘘みたいに今日蘇りました。

⑥40代以降<芸術仲間として熊本義泰さん>

私は昭和54年に鹿島に帰ってきましたが、その時は、菊池先生が美協の事務局をしておられました。先生は私と名前の文字が同じなんです。読み方は違うのですが、菊池先生は『よしやす』、僕は『よしひろ』と読みます。こういう名前の方は今までお目にかかったことがなかったので、非常に親しみを感じた覚えがあります。

私は帰ってきたものの、当初は地元であまり馴れていなかったもので、菊池先生にいろいろ相談していました。菊池先生は将棋がお好きでした。私も将棋が好きで、自分の仕事がひと段落ついた時に、「菊池先生どうですか？」と電話すると、一回も断られたことがないですね。「良いですよ、やりましょう」とかというようなことで、僕がお訪ねして将棋をしていました。ちょうど実力も似た感じで、2段くらいかな、勝ったり負けたりで、その時に、いろいろな話をしていただきました。僕は焼き物を焼いていて、絵の

方の専門ではありませんでしたが、若い頃は絵もかじっていましたので、先生の作品に色々と感想を言ったりしてました。最初の頃はアトリエでやっていたので、先生の描きかけの絵なんかを見ながら、今度は浜を描かれていますねと嬉しくなったりしたことがあります。

平成12年に先生が鹿島の美術人協会の会長を僕と交代されて、私が12年から会長になったのですが、翌13年から浜で肥前浜宿スケッチ大会というのを始めました。菊池先生もその時にはお見えになりました。呉竹酒造の事務所に掛かっていた菊池先生の若い頃の絵で、すごく良い絵でしたが、その時先生は一生懸命それを磨いて、油で修正しておられました。非常に慈しんでおられたみたいな印象があります。

平成14年に先生が亡くなられるのですが、ちょうど前日に私はすれ違ったんですよ。車を運転しておられまして、菊池先生は60代で運転免許を取られたので、もう前だけ見ているような運転の仕方、「あー菊池先生だな」と見ながらすれ違ったのですが、次の日亡くなられたので、もうびっくりしました。私は会長をしていたから弔辞を読んだのですが、菊池先生の人となりについて、僕は将棋をしていて分ったんですけど、非常に頑固でしたね。素直な様に見えますが、実は非常に頑固でした。その辺はよく性格が分かりましたね。

⑦40代以降<芸術仲間として松尾英樹さん>

私が昭和39年に北鹿島中学校に赴任したとき、北鹿島におられたので、幸福寺の和尚さんと3人でよく飲んだ覚えがあります。酒は大好きでしたね。そして会長をされた時に私も一回事務局をしたんじゃないかと思いますが、佐賀銀行で式典をした時に、大変苦勞して一緒にやった思い出があります。絵の方は私は下手ですが、私が焼き物をやっていたので、私には「ひでえもん英衛門、英衛門」といつも言っておられましたね。私は家に窯を持っていますので「俺にも描かせてくれんかにゃあ」と言われて、2回くらい来られたと思います。描いたものは持ち帰られましたけど



どね、私にも少しくささいと言って貰った絵付けの皿を今日持って来ました。(上写真) 皿なんかにも結構描かれていたようで、「家に置いておき、なしじゃい無しなっけんにゃあ」とぼやいておられました。皆飲みに来てそのまま持って帰ったのではないかと思います。やっぱり達筆だったからですね。ここにはがね(蟹)の絵を持ってきておりますが、面浮立の絵もあります。とにかくこれを見てもわかるように達筆ですね。もう、何も見ないで、ぱっぱっと描かれるのです。後でゆっくり見てください。

⑧40代以降<岩永京吉夫人の八千代さん>

私の思い出としては、私のいない時に菊池先生が遊びに来られたことがあって、その時主人が丁度そこにあった牡蠣をフライパンで油で焼いて一緒に飲んだということがありました。その後先生にお会いした時、「あん時の牡蠣あ美味かったあ、初めて食うた」と言われたことが印象深く思い出されます。

それから、主人が「今日は菊池先生と、車だったけど、丁度、藤家さん家の角で菊池さんと会った。あの菊池さんと会った」と話していたことがありました。しかし、その翌日に先生が亡くなられたと聞いてびっくりしました。そのような記憶があります。

⑨70代の頃<祐徳博物館の松尾和義さん…コメント紹介>

菊池さんは、祐徳稲荷神社の総代役員として平成4年頃から亡くなられるまで10年程在任されていたようです。祐徳博物館における「郷土作家絵画展」の展示・飾りつけも担当されていたとのことで、松尾さんが博物館勤務となったのが平成13年11月ですから、翌年の平成14年の絵画展が菊池さんと一緒にした最初で最後の展示・飾りつけとなったそうです。

菊池さんは、物腰穏やかで人当たりが良く温厚篤実といった感じで、ご壮健そのものに見えたので、突然の訃報に大変驚いたことが10年以上経った今でも鮮明に思い出されるとのことでした。

菊池さんは絵筆一本での画業でしたから、奥様の内助の功が大きかったのではということ、松尾さんはよく聞いたことがあるそうです。そういう奥様の理解とともに、菊池さんは絵の才能に対する自負心や芸術に対する一家を成す気概などもお持ちだったのではと、松尾さんは推測しておられます

毎年8月、神社の夏祭りの際に境内に「灯籠祭り作品」を掲示するそうですが、菊池さんが出品された作品が祐徳博物館に残されていたということで、今回お借りして、こちらの壁に貼っております。後でご覧ください。(最後に金子さんから作品解説あり)



⑩家庭内での菊池氏<妻のアイ子さん>

絵描きの妻として私はどうだったかなと今、後悔をしております。もう少し理解があつたらどうにかなっていたのじゃないかなと思いますが、家の生活もありましたので、主人に濟まないこともあつたと思います。本当に絵一本で食べていけるだろうかと思ってですね。私は父から「お前が食べていけるようなら行け」と言われて嫁いだものですから、私が一生懸命仕事して生活しなければなりません。他に主人に役に立つようなことができれば良かったのではと今でも後悔しております。

主人は、皆さんがおっしゃるように優しい面があつたと思いますが、家ではやっぱり亭主関白で、私には厳しかったですね。自分が気に食わなかったら、短気に行動するところがありまして、大分苦勞もしました。でも、皆さんのおかげで、これまでやってこれたのは幸せだったと感謝しております。ありがとうございました。

⑪家庭内での菊池氏<長男の勝男さん>

親父の思い出としては、子供の頃は、親父が家の庭でよく空を見上げてぼーっとする時間が多かったのを覚えています。傍から見るとぼーっとしているように見えるのですが、多分大気の動きとか時間の経過とともに変化する空の色とか、映し出される風景の色とかをよく観察していたんだと思います。そういう事でキャンパスに向かう時間よりも、かえってそういう何かを見る観察する時間の方がかえって長かったように感じております。

小学校のスケッチ会とかで審査員なんかもしていたみたいですけど、「土は茶、木の幹も茶、葉っぱは緑、青空は水色、雲は白、ほんなこて、ぎゃん見ゆっかい(本当にそう見えるか)」と言っていました。実は親父の目から見たら全然違う色に見えていたのではないかと思います。また、スケッチ会とかで母親が手を入れたりすると一目でわかると言っていました。そういうのは選ばないとも言っていました。

また私が高校になって美術部に在籍して、1年の時県のデッサンコンクールで奨励賞を頂いたんですけ

ど、そのときのデッサンを見て、「確かに下手じゃなか。下手じゃなかばってん、明るいところは明るい、暗いところは暗い、だけど陰の部分にも光がある。それを見て描写しろ」と言われたのですよ。その時、「ああ、自分には無理だな」と思ったのです。引導を渡されたような気がしました。そこまでは自分の能力じゃ出来ないということですね。そういう思い出があります。

⑫その他参加者からの思い出話<ご近所の伊東さん>

私は菊池先生とは8歳くらい違うので、中学校に颯爽として通っておられる姿を見て、私達から見れば憧れの的でした。色々な遊びを習ったのも菊池先生からです。

奥さんからさっきお話があったように、実は厳しい時代もあったわけです。そういう中で、奥さんは夜も寝ないようにして、一生懸命働いておられました。それは私が近くにいてよく知っております。その後の菊池さんがあるのは奥さんの内助の功が素晴らしかったからではないかなと思っております。今でもそういうふうな面で尊敬しています。

私は絵のことは分かりませんが、先生は、小学校の絵の大会の選考に行った時の話を、「せっかく子供が純真な絵を描いているのに親が来て邪魔してね」と、そういう話もしておられました。

先生は、ヨーロッパにも行かれましたし、日展にも数多く入選されておられます。そういう経歴の中で郷土画家に最後まで徹せられたっていうのは素晴らしいことだと思っております。普通なら、これだけの経歴があれば中央に出てもっと経済的にも良い仕事をされたんじゃないかなって思っておりますが、菊池先生はそういう風なことはやめて郷土に徹せられた事は非常に尊敬できる素晴らしいことだと思っております。

それから、今お酒の話が出ましたけれど、お酒を飲みながら菊池先生とつがね（つ蟹）の話をしている時、先生が私の目の前でさらさらと描かれたことがありました。ただこの時はお酒が入っていたので、足の数を間違ったからやれないというのを、私が無理やり貰って、茶の間に掛けて毎日菊池先生の思い出に浸っております。

⑬その他参加者からの思い出話<同級生の鶴さん>

私は鹿島中学校の同級生です。終戦後、兵隊から帰ってきて、鹿島で会って、私は農業をしています。いつも私のところに来て酒を飲んで、方言交じりの言葉で滔々と語った仲です。本当に鹿島では勿体ない、学校の先生なんかしておれば経済的にもよかったんでしょうけれど、自分の力で、この田舎でよく描いて働いた、生活も大変だったと思います。東京とか大阪とか大都会であれば良かったでしょうけど、それができないから飄々として、まあ奥様の内助の功があったろうと思います。私共もとにかくあの時代は、終戦後は経済的にも苦しい時代でしたけれど、飄々として、肚の大きい人でありました。今もこの人のことを思って、素晴らしい人を思って、私は残念でたまりません。だから、菊池先生が亡くなっても皆さんが、こうして菊池先生を慕って、こういうような思い出を語る会をしていただいて、本当に同級生として感謝の気持ちで一杯です。

⑭その他参加者からの思い出話<絵画教室の生徒だった上野さん>

先生が小学校の時に塾をされていた時の写真を持ってきました。
(右写真)



私は北鹿島の小中学校を出ておりますが、菊池先生が本町・乙丸の子供たちを集めて絵画を教えておられたので、小学校5～6年の時に、昭和28年頃ですが、私も通っておりました。小学校の講堂の裏に図書室があったと思いますけど、普段先生はそこで教えていて、時々スケッチに、蟻尾山とか観瀾堤の方に連れて行っていただきました。子供たちは小学校1年生から5～6年生までおりましたが、大概2～3級年離れた兄弟二人ずつとか三人ずつとか習っておまして、私も妹と一緒に通っておりました。

それから菊池先生は中学校のクラブの講師とかもされていて、私も中学の時、勤労者美術展に出しなさいと言われて、先生の指導を頂いて出品した思い出があります。

◆杉光定さんによる菊池作品の解説<パワーポイント使用>

私が大学在学中に鹿島美術人協会が組織され、今では会長をしているわけですが、当時は生意気なことばかりを申しておりましたので、菊池先生がプロとしての気概を強く言われたことがありました。「わいのごたつとにまだ負けんぞ（お前のような者にはまだ負けないぞ）」と。ちょうど日展にも出品され、一水会の会員になられて、方向性がはっきりしておられた頃です。本当にプロの厳しさあたりも聞いておりましたし、奥さんのご苦勞あたりも若干聞いておりました。ですから、私などは教壇に立ちながら、中央の公募展に出すという美術教師をしておりましたので、経済環境は安定していました。今は、退職して鹿島に何とか貢献しなきゃいけないという思いで、絵画教室を始めたりしております。

菊池先生の作品を私が色々講釈するのもおこがましくて申し訳ないのですが、一応絵を描いてきておりますし、今日は金子先生もおいででするので助言あたりも頂きたいところです。

ここに『菊池ブルーを感じて』と書いていますが、これは先生の作品をずっと見てきて、ブルーが非常に綺麗だなと第一印象として思っておりました。平成25年3月末に菊池先生の遺作展をやろうということで美術人協会が企画をした時、先生の遺作を写真に収めましたので、今回、紹介しながらお話ししたいと思います。

まず、菊池先生のブルーの使い方について私なりの感想を述べていきたいと思えます。<ブルーの多用の効果>としておりますが、元々日本人はブルーとかグレーとか好きですね。西洋などでは原色の壁とか屋根とかあるのですが、日本では見渡してもやはりグレー、ブルーが多い。それが落ち着くというか日本風な感じがしますね。ブルーが持っている特徴でもあると思えますが、清涼感、静寂感に加えて、菊池先生は、絵を画くモチーフとして、家なら家、山なら山、そういうものを造形的に位置確認として絵づくりをしていらっしゃることが、構図を見ると分かります。

使われている色には、ウルトラマリンブルー、コバルトブルー、セルリアンブルー、コンポーズブルー、バジターブルー、ターコイズブルー、他にもプルシャンブルーとかあります。同じブルーにも、こんなに色があると判っていただければ結構です。



これは何故判ったかという、菊池先生が残された絵具の中に、このような多様なブルーを見つけたからです。よく見ると、日本製ばかりではなく、例えばラウニーなんかはイギリス製ですね。

それでは具体的にこの絵で示していきます。空の

上の方はターコイズブルーっていう色ですね。それから丁度中間がコンポーズブルー、ちょっと緑がかっていますね。それから紫がかったちょっと下の方がバジターブルー。一番下がウルトラマリブルー。こういう風に、ブルーを上手く使われております。そういうことで色のバール、言いかえれば、色のもつ明るさや暗さ、強さや弱さ、そういうものを上手く組み合わせながら、画面を作っている感じがしました。先程、息子さんが「空をぼけーっと見おった」と言われましたけれど、こういうのを探していらしたんですね。先日、太良から帰って来る時、有明海の方を見ながら、また天山の方を見ながら空を見ていたのですが、本当にこういう色をしているんですね。やはり菊池先生はよく空を見上げておられたんだなど。そして実際描いていらっしゃいますから、より具体的に色探しをされていたんだという様に思います。

それから右の絵は、画面がちょっと暗いですが、夕方でしょうか。こんなところ鹿島の辺にはないですね。唐津の辺でしょうか？この暗い中にいわゆるハーフトーン、中間の色、その中にネーブルズイエローみたいな色が効いています。そしてこの水面の描き方が本当にすばらしい。手前から奥に行くと奥からまた手前に来る空の空間表現はみごとですね。この風景の捉え方、これは相当力量がいるのです。



(この絵については、金子剛さんからも発言あり)

この絵は、ヨーロッパナイズされたような、何か印象派風な画作りが感じられます。左側に人物の入った栈橋のように描いてあるでしょ。奥に煙突の様な塔がある。ヨーロッパの作品に多いんですね、このような構図は。だから、ちょっとそういう影響を受けられた後かなと、菊池先生がヨーロッパ旅行をされた後かなと思いました。これまでの作品の色々な風景とちょっと違いますね。これはえらく洒落ていると思います。

(他に作品数点解説)

結局のところ、菊池先生はブルーが好きだった事に間違いありません。故郷の自然を観察しながら目で捉えた色をバールを意識しながら、奥行を考え、静寂観や雲の色の变化や風の動きなど、本当に自然をしっかり見ておられたと思います。そしてそれをどう描こうかと、空の大きさやその下で生活する人間の存在を風景として描きたかったのではないかと思います。

そして今回、私はブルーに注目しましたが、グリーンについても、畑の描き方とかそういったところからも検証すれば良いなと思います。そうすれば、先生の作品の色の使い方についてまた話せるんじゃないかと思います。

菊池先生は、ブルーという難しい色を、これだけ上手くバールを考えながら自分の作風として、色使いとしてもってこられていますので、もう少し作品を見てみたかったというのが正直な気持ちです。また、生活からすると非常に困窮を極めながらも、これだけの画を残して私達に伝えて貰ったのは非常にありがたいことだとも思います。そして、このような鹿島の文化的基盤を私たちは後世にもっと伝えていかななくてはいけないと思うのです。今後は、今回のような検証をしながらお互い先達を大事にする、そして私たちが引き継いでいくといった、そういう責任を担っているのではないかと考えております。この機会を通じてですけど、よろしくお願ひしたいと思ひます。

(最後に、会場に掲示した「灯籠祭り作品」の水彩画について、金子さんより解説あり)

今回、油絵の中でのデッサン力の素晴らしさはいくらでも見えたのだけど、(水彩画を指して) こういうのを描けるといのは、また別の才能、デッサンの力が本当になければできない絵なんです。菊池先生は即興で描くようなところもあられたみたいですが、素晴らしいデッサンですね。こういう力を持った人が今はいないですね。そういう意味では勿体ない、非常に惜しい、力を持った先生だったのではないかと思います。さっきは色の事ができましたけれども、根底にあるデッサン力というのかな、そういうものがすごく垣間見える作品だと思います。是非そういう観点でも見ていただければ有難いと思います。ありがとうございました。



※このレポートは、後日伺った話も適宜加えながら、構成しています。(事務局)

